
疾走

猫離脱

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

疾走

【Nコード】

N5589E

【作者名】

猫離脱

【あらすじ】

まったく、どうなっえrkうkfff\$VZS。通信不全か。時差がある。

これを書き出したのが4月1日、今はあまり騒がなくなったが4月馬鹿という日だ。

彼は老婆を犯し男に女として犯されている。

彼はこれまでの人生を詰める鞆を探している。

彼は鈴木夏生といった。夏生は今日休みだった。彼の望む平穩さが彼の部屋にはあったが彼はそれに疑問を感じつつあった。苦心して掴んだはずの平穩は彼のまだ若い人生経験におさまらなかった。彼は部屋から台所につつまる暖簾をいつもとは違う感じでぐり場所と時間について考えた結果を行動に移していた。見えるのは部屋と部屋を区切る敷居で暖簾が下がっているが実は本当にこの敷居で区切られている境界を越えるために通る道は暖簾の下のきわめて小さな隙間なのではないかと推測した。そこを通ることにより本当の次の場所である台所にたどり着くのではと考えていたのだ。

夏生は旅が好きで遠出することも多かった。車をつかい夜通しかけて目的地まで走り抜き次の仕事までに帰ってくる。深夜行の電車も苦にならず行き当たりばったりで機会さえあれば海外へも足をはこんだ。夏生は25歳だった。彼の頭には旅先で出会った各地の風景や臭いや季節が自然とすり込まれていた。彼は今の倦怠感を乗り越えさえすれば旅の達人の域に達するだろうという考えを勝手に持っていた。だから彼はこうした行動を部屋でとっているのだ。少しばかりの旅から帰ってきたばかりだった。正確には目的地に着くのを途中で断念し今朝方戻ってきた。少し寝て起きて残りの休日をお過ごしていたのだ。

夏生理論日本編では道は似ている。同じように道が通り脇に店ができ川が流れ橋が架かり集落があり桜が咲いている。それはなにかの本で見つけた訳でなく百聞は一見に如かずのたまものだった。しかしこれしきのことは何とか学の範囲内で大学なんかで教えられてい

るのだろう。夏生はそういった学問というか大学に対し劣等感からの反骨心をもっていた。単に入学試験に落ちていたからにすぎなかったが夏生はそこへの移動がかなわなかったと最近考えるようになっていた。仕事をするようになり自由に使えるお金が増え、休みを利用して旅を続けた。どこへでも行けるし行ってきたつもりだったがどうもそれだけではないような気がしていた。これは今の夏生の課題だった。

旅の本質は置いておいて、本当の意味での移動とはたどり着くとはどういう事かを夏生は探ろうとしていた。今朝戻ってきたのは何となく気乗りしないこともあるがそこを考えながらの事だった。そのまま進んでいけば間違いなくたどり着いたであろう場所に今夏生はいない。そこにたどり着いていないからその景色は夏生にはない。そこにたどり着いて景色を納め戻ってくる。たどり着いたことの満足感と望んだ景色を頭の引き出しから自由に引きだす権利を手にする。それが今回はない。

彼は台所を突っ切りトイレのドアを開け閉め開け台所を突っ切り部屋に戻りベッドに寝ころんだ。

訪れ ロシア編

ロシア正教がなにか知らない。その絵がまさに気持ち悪いのだ。日本の漫画で育った世代としては耐え難くその冊子を受け取る気にはならなかった。

二人一組で布教をしているのかスーツとも船乗りの制服ともしれない同じ服装をしてマウンテンバイク型の自転車にのりしっかりとヘルメットを着用している。

まずはそれらを脱いで一度教会へ訪れてみませんかと誘われる。

この人たちは何を言っているのか、夏生は思い、茶すら出すことを思いつかなかった。

内密な商談をしている気にすらなった。

ウラジミール、セルゲイ、イワン、ストラニチエンコ、頭に浮かぶロシア的名称をあげておいたが彼らは名のらなかった。それはそれでいい。これぞロシア的か、そうに違いない。

毎週月曜日のおとない、決まって夜の七時半からの時間帯。夏生は断らなかった。といつても、何らかの強い勧誘を受けたわけではなかった。ただの訪問で何か売りつけられるわけでもなく洗脳されている気もしなかった。互いも事について少しの世間話もするし、最近あったことなど1週間に一度だけだし気にも留めなかった。

しいてあげれば茶をだすようになったくらいものか。

何週目かになって、2人組が1人になった。二人のうち小さい方だけがあつ月曜にいつもどおりの時間に来て夏生は言った。

「あれ、もうひとりはい」

セルゲイは帰ったというのだった。

大きな方はセルゲイといい、ロシアで事業家の父が会社だか事業所だかを移転するにあたって引っ越しをするのもういられなくなつたような云々かんぬんの説明を受けた。

スルトというもう一人はセルゲイと一緒に日本にやってきていたが彼は母国にまだ帰りたくないという。

日本が好きなのと夏生は聞いたが、スルトはわからないと答えた。とりあえず日本語はうまいし、何とかなるんじゃないのかと人ごとのように感じていた。

それから彼スルトはやはり毎週訪れるのだが、聖書やらなにやらの本やパンフ等はいっさいもってこなくなった。

最初は数十分からやがて30分、1時間というようになり。夏生は話し相手がいなくなりさびしんだらうとおもい、スルトのするままだに任せていた。はじめから遠慮という気持ちは礼儀からかなにかからはしらないが持ち合わせているらしく、それがなくならないかぎ

りは悪くはないだろうと夏生はおもい接していた。
毎週月曜日はロシアデー、夏生の中ではそう決まりつつあった。

彼はテレビを見ない。新聞もよまず、本も雑誌も読まなかった。音楽も特に聴かず。静かなのを好んだ。時に暗闇を、ときに太陽を集中して浴びたりした。

昔、病院に入院したことがあった。暇だろうとか、寝られますかとかたずねられるのだが、そんな事はなかった。食事も文句はない。なんにたいしてもなぜか文句などなかった。

ただ、そうあるだけ。ただ、そうなのだろうと感じていた。

4人部屋の周りはお年寄りで、前の若干若い入院患者が退院するときに周りの老人の食事後のお膳をかたづけやっっているのを彼は自分の仕事とした。後は少し話しかけられたら答え、老人の家族らが来たときも愛想よくするだけだった。

思ったほど、苦痛ではなかった。

寝て、起きて、食事をして、検査をし、その時はテレビを見、本を読み、雑誌をみた。音楽も携帯から取り入れた。そのせいかもしれない、今このときがあるのは。そのときはむさぼった。時間はあるし一人になれるし。その反動か。

年寄りの朝は早く、かちやかちや朝食の箸の準備をして決められた時間にお膳が遅れると機嫌が悪かった。ばくばく食欲旺盛。そのくせご飯に文句を言う。寝る。屁をこく。いびきをかく。彼は観察をしていた。家族や親類、友人近所の人たちが見舞いに来る。ときにはどこかの姪っ子だかいい年をしたおばさんとはハグして励まし合っていた。

とにかくとにかくだった。

彼の方にも友人が何人かきて、本やら雑誌、水等を持ってきた。職場の上司が来たときはなぜか冷や汗をかいた。ジャージを着て寝

つ転がってテレビを見ている姿はただの親父に近い。彼はそのときテレビを見ていたのではなく、代わり映えない窓の外を見て考え事をしていたのだ。そういう自分の時が打ち破られた瞬間だった。あるだろうが、想定していない、病人として油断というか当然の権利ともいえた。彼は彼に話しかけていた。

この病院は風水的に四神相応ではないのか。さすが病院といわれるだけのことはある。地方都市の敷地面積を有効に使い、各地から集まってくる人数は何万人だろうか。入院患者も部屋の数部屋の番号からいけば何千人。働いている人は、看護師は医師はどれくらい。売店のお姉さんは何日交代か、自動販売機の数。ともかく、別な世界に旅行にきた感じだった。幸いこれまで健康で病院には縁がなくて過ごしてきた彼には真新しさが毎日だった。

東に青龍。これはあの線路と道路だな。電車が走り車が列をなししている。特に貨物列車が通るさまはまさにそれだ。南はあの山。孤峰。でこの地方で何とか富士といわれる山だ。天気の良い日は頂上までよく見える。鮮やかで優雅なさまはまさに朱雀。

さあ、あと二神。この部屋からは東南しか拝めない。明日から調査に出かけよう。時間はある。注射の後だけが黄色く濁り外は晴れ渡り真っ白な壁、薄紅色のカーテン、病院の臭い。文句があるとすればこの臭い。病院の臭い。注射。検査。元気なお年寄り。死にそうな患者。その中の自分はふわふわしていてあきらかに異質だった。

スルト、なんでオレンとこに来たの。唐突に訪ねてみた。月曜日の8時半頃だった。

答えないでいるから、ほんとに最初の時のこと、セルゲイとスルト一緒に来たでしょ。その最初の時のこと。ここら辺回ってたりしたの。それともオレのことつけてたりした。そこら辺のことを聞いた。スルトは言った。夏生さん覚えてないですか。昔スーパールのレジで助けてくれました。そのときうれしかった。お礼いいかったけどいなくなつた。後から、またそのスーパールで見つけてアパート知っ

た。すみません。

別にあやまることではないが、そんなことあったか夏生は思い出せなかった。そんな時もスルトだったと聞くとはいと答えた。スルトは確かにセルゲイと比べると日本人っぽい。たぶん自分は何も気づかずに言葉も聞かずに顔も見ずに何かしたのだろう。

そういえばレジで財布を出して数えるような返品するようなもたしたことがあったかもしれない。列が長くなりかけていて誰もが困ってしまいそうになりかけの瞬間に自分がか余計な事かもしれないが気の利いた風な事をしたような気がした。

そうかあんときがスルトだったのか。夏生は少し懐かしんでみた。

スルトは恐縮していた。まるで日本人のようだ。

まあ、今日はスルトの就職祝いだ。あまりいろいろ聞くのもなんだしビールでいいかと聞くといいらしいのでそれで乾杯した。

スルトは貧しくて日本に来て家に送金してだからセルゲイと帰らずここにいるんだろうなんて考えてやめた。

まあいい。今日は月曜日だし。スルトは来たし。迷惑ではない。夏生は何を話すわけでもなくなるまでスルトと時間をすごしスルトは帰って行った。

スルトが時を思い出させてくれる。時間を月曜日を。夜の七時を。うらうらと部屋を一人彷徨い夏生は風呂を沸かしその水をずっと見ていた。ビールの缶を片手にもう一つの腕がしびれるまでほをつきお湯があふれて止めた。

アパートにこの部屋に人が集まってくると思うのはまだ早すぎるとも思ったが、そう思ってしまった認識があった。

スルトは夏生の中で完全に良いやつだった。それは計算がたつからでもあった。必ず月曜日だけ決められた時間に来る。それは夏生はまったく望んでいた。そのスルトが来た次の日だとすれば火曜日だ。

火曜日。の女。出会いは火曜日だ。それは重要なのかしれず、なんだか心に残った。

それはそうだ。もう一つ連想させるものが夏生にはあったのだ。火だ。そう火だ。最初に火ありますかと聞かれたのだ。火曜日は後付だ。そう火だ火があるかと新手的ナンパかと思つた。残念ながらないというところじゃあタバコもないでしよと言ふのだった。ない。と答えたがそうか。うん。といい、ねえときりだした。それが篠崎楓と言ふ女だった。

そのときは周りにしゃがませた男を囲ませて、でも男らはなぜか怖そうでもなんともなく女も普通っぽいのだつた。何をしているのかしゃがんで集まる場所でもなくただの道ばた。お腹が痛い女を介抱している同級生といった感じ。じつさい、男らは学生服。高校生かなにかか、女もそうか。でもそのときの楓の服装が思い出せない。セーラー服でもないし、そうだったら完全に学生と思つし、そう思つてないとすれば私服だが、まずもつてわからない。で、次の日は楓は一人で同じ場所に立つていた。それは水曜日だった。

恋したあこがれの先輩にいいように振られ、進路のことで親や先生ともめて、友達もなくあてがない女なのだろうと夏生はみてとつた。燕が電線に止まりまたいつ飛び立つだろうくらいの目線で楓を見ていた。

水曜日だった。部屋を綺麗に掃除してくれたというか、何か暇というので掃除をさせた。いろいろないいながら楽しんでる風にみえたおままごとだった。その内料理もつくりだした。楓は楽しいだろうということはわかつた。

この街は終わるよ。街を活かそうとしすぎて人を活かしてない。楓はここがこの街が日本が嫌いというのだった。それに対して夏生はそう答えた。

でも、いいよ。自分は嫌いじゃないんだ。終わるのはわかるそのまま終わらせて欲しい。自分が嫌いなのはそうはならないことが嫌いなところかなと夏生は答えた。

かわんないと楓は言うので話を变えていろいろ旅行の話をしてやったらそれはそれで結構乗ってきた。日本は嫌いなはずなのに。もったいないと夏生は思った。自分もこうだったのかを振り返った。今では夏生は自分が日本だと思っようになった。自分がどこか歴史の一部分をなぞっているだけの気がするのだった。鎖国する日本、開国を迫る外国。戦争に負けてメリケンの統治下に置かれている。メディアはアメリカそのもの。訳もなく一人夜道を歩けば誰もなく物音がするとおびえれば飛び出した猫であつたり、たまに街灯の下自分の影におびえそくさと後ろを振り返らず逃げてゆく。魍魎魍魎のせいにするのか。自分は日本ではなくマクロ的だかミクロ的だか八百万の神になるのだ。日本そのものではなく、そこに住まう神になるのだと夏生は思った。楓は自分を嫌いだという。夏生はそうではない、しかし自分もそう思いたいのだ。だから日本をそのままにしておきたい。終わるのだから。それはいいのだと思う。ほんとにそうかと誰かが聞くとすればやはり自分しかないのだが、今はそれがいいように感じる。満足しているのだから。

アクションを起こすとすれば起きるのか起こすのか、朝が来るのか来てしまうのか。

楓は割に美人でそれは僥倖以外の何者でもなかった。あなたはなにをしてるんですか。わすれてしまいました。いまだここにいてだれとなにをしているんだろ。1分2分10分30分時を数えやがて過ぎていく。

うまいやり方一日のくくり24時間で一周。それでいて時は進んでいく。どこかにどっちに。それは一周は積み重なっているのか、捨てられるだけなのか。どこかはどっちでそのゴミがそこにまっているのか。

一瞬で目が覚めるそのときからその瞬間に今までの時間が廻転してゼンマイのように反発して目が覚めた後の活動を支える。

休みの日になると夏生は考えて眠る。眠るとは起きながらにして眠

る。

休みの日に楓が来るのははじめてだった。

なんて説明しようか。言い訳か。

なにかが始まらないところにいると思いこんでいる楓は有無を言わずになにかがはじまっている朝に機嫌が悪かった。

毒をだしてしまふ。はきだす。夏生はそれをやってきた。まだ足りない。まだ足りない。夏生は眠っている。いずれどっちかだ。いずれそうなるようになるのを前倒して、起きると昼だった。楓は朝か昼か夜かぼんやりしていた。

コーヒーでも飲む。と楓にいわれて、夏生はまだ昼だと感じた。

隠している紅茶緑茶やらいずれ気づくのだろう。楓に変わって欲しくなかった。ここにどっぶりつかってやがて気づく。それしかない。と、底がつかば終わりなのだと。巻いて巻いてその巻きが最後まで持たないだろう。それは夏生専用で楓のはまた別にあるはずなのだが一人分の底が二人分だとすると夏生も考えないではなかった。こういうところの細かい計算はできないが判断はできる。負荷の容量や数式はしらないが保たなくなるのを黙ってながめているほど老いてはいなかった。まずは楓の巻きに乗る。ロシアとの取引。当面浮かぶのはそれだ。持ちうる最初の最善の策を尽くす。理想がどうのこのの、計算がもくろみがと言っている間にも特急は進んでいくのだ。

細かい計算はできないが細部に気が回りその細部が全体を崩していくことを知っていて詳細な設計のないままに補修する。気が小さいのか大きいのか、夏生は自己分析する。

細部の計算をしていたのでは間に合わない。細部の補修を怠ることを起因とした崩壊を解っていて止められないは耐え難い。どっちつかずといえばそうともいえる。半端。しかしこれが自分で自分にできることのすべて。常にそうだ。今、自分にできることのすべてをやるんだ。

夏生は天才だと思う。自分自身の天才。自分の為の天才。そういう

ところに気づかないわけではなかった。

役所に行って住民票を取ってきた。携帯電話を新規購入した。

楓は自動車学校の卒検を無事終えた。

スルトは丁寧な日本語を話した。

電話番号がスルト、運転手が楓。そのどちらもサポートしその他もろもろを夏生がこなす。

パソコンと携帯のホームページをつくった。

カリギュラがよいかツアアリがよいかもめた。

一番の問題が人員の確保だった。

広告を出して何とか4人を確保してその友達の友達とやらを補欠で登録した。

夏生は近所の空き地をいくらでも知っていた。車検を1年度に控えた白の新車を売却して中古の軽ワゴンをそろえた。色は黒にしたかったが楓はブルーメタリックを選んだ。同じ色同じ車種二台だ。これは兄弟といい。私がいずれ名前を付けるとうれしそうだった。

スルトは週一でなくほぼ毎日顔を合わせるようになった。携帯を渡した。スルトは張り切っていた。練習だと言って何度も電話をかけてくる。楓にはメールだ。

夏生が心配していたのが楓だった。親とかは何も言わないのといったが、大丈夫と答えた。

その答えは夏生を納得させなかった。それはよくある大丈夫じゃない練習だと夏生はいった。私、専門学校いくし、それで親は納得したと言った。

そうかそれは良かったと夏生は言った。

ねーどーするお父さん車買ってくれて買っちゃおかー。

楓は言う。専門学校ってどんなんと夏生が聞くとお菓子の専門学校と言う。

夏生は免許書のコピーと入学証明書を楓から預かった。試しに履歴書も書かせてみた。

学校で私もスカウトするねーと楓ははしゃぎ、お客も取ってこようかそういうのって営業って言うんでしょと生意気なことも言う。まあいいか。夏生は思う。

薄い縞のスーツをきて衿をはだけてとんがり革靴をはいてお腹は出ていなかった。

10時10分 ソヨ子

11時11分 あやか

名刺は自信作で夏生は営業部長の肩書きだった。

途中スルトから電話が入りいまい具合に忙しさと箔のついた話しづりをアピールできた。

二人とも時間に遅れなかった。夏生はそれをメモした。簡単な誓約書を書かせた。写真を撮った。

この二人は本命だった。明日からでも今日からでもものになる。

0時0分 はるか

1時1分 きょうこ

ホームページを更新した。

どれくらい稼げるかきょうこは切実だった。はるかはぼんやりしていた。

一ヶ月くらいがあつという間に過ぎ去った。

何も問題は起きそうになかった。始めることが問題でそれを解決するのが仕事で段取りも準備も怠らなかった。部相応にっていてそれは機動に乗った。あとはそれを堅実にどれだけ続けていくか、そしてその次については一足飛びに次のメニューを組んでおくのだ。ある程度展開させたら最初に戻してもいい。夏生は解っていた。

夜を巡る当てがあつた。朝日とともに帰ってきて昨日の蝙蝠の死骸が同じところにあつた。

朝日は鼻がむずかゆくなるだけでまぶしくはなかった。

朝日を浴びながらの交配が寿命を延ばす云々の迷信を楓にしようとしたがやめた。それくらいだった。こつこつと小銭が貯まっていた。無理はしなかった。第一段階、続けること。スルトはお金が入っても一見変わらないようだった。信仰のせいかな母国への仕送りの為か無自覚なのか、よい兆候だった。

楓は学校にちゃんとかよっていた。

そんなことは夏生には関係ないのかもしれない。親みたいといわれそう。

まさに好きな人とかできたかとか聞きそう。まあ親でも言わないかそんなこと。

なんでなんで、なんで抱いてくれないのか。

それはなぜだろうか。夏生は答えを考えた。聞かれればでてくるのだろうがそれはあまりにギャブル性を伴い夏生はそれに弱いことを自覚していた。大事なことを自分の負けることに賭したくない。

スルトはタルコフスキーについて語り夏生はDVD集全巻を借りて眠りの幻術にした。

楓のタルタルソースは絶品で生の人参をたくさん食べた。

眠って食べて仕事をして、繰り返しだった。

夏生は順調に仕上げた。時々あえての間違いを犯すことも悪くはないと気づき始めた。

夏生は根が生えてこなかった。これではないと知っていた。またこてもないのだ。

何が原因かはわかっていいるのだ。夏生はぐうのねもでなかった。もう充分だ。

これを誰に話そう。

季節は美しく風を心地よく闇もやわらかく朝日は細雨でコオロギが鳴った。

ふつと我に返るとまだここにいた。

それで問題は何か。それは問題ではない。ここをこつする。今はこれでいい、このまま。

あれはもう辞めよう。そうそれ。そのとうり。いや、続けよう。

時々がちゃがちゃなことになって裸で車に乗り込む。午前1時から4時までそれで仕事をこなした。のろまなカタツムリはそれでも起きてきて亀のようにウサギにかとうとしていた。車から降りるタイミングを失って、楓に服を持ってきてもらったのが。午前7時。楓の運転で本業を辞めた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5589e/>

疾走

2010年12月28日05時38分発行